周惇頤の墓——その歴史と現況

吾　妻　重　二

On Tomb of Zhou Dunyi —— Its History and Present Situation

AZUMA Juji

The tomb of Zhou Dunyi（周惇頤1017-1073）, a philosopher of North Song China, is located in suburb of Jiujiang City, Jiangxi Province. The tomb was maintained by local gentries 郷紳 and literati thorough Late Imperial China. Especially, the maintenance by Peng Yulin彭玉麟 in 19th Century was large in scale. Its figure was investigated by Tokiwa Daijo常盤大定, a scholar of Japan, in 20th Century. But the tomb was thoroughly destroyed during the Great Cultural Revolution. Fortunately, the tomb was restored and regained the present figure in the beginning of this century. This paper will give a detailed explanation of its history and the situation of Confucianism in modern China.

キーワード：濂渓墓、九江、彭玉麟、常盤大定、文化大革命

はじめに

北宋の周惇頤（1017-1073）は近世東アジアの思想史においてひときわ光芒を放つ人物である。宇宙の生成と構造を提示した「太極図・図説」、さっぱりとして物事に拘泥しない「胸中洒落」の高雅な精神、人は誰でも学問によって聖人になりうる可能性をもつとする「聖人可学論」など、いずれにおいても深い思索に裏づけられた斬新な内容をもつところから、のち南宋の朱熹（1130-1200）に取り入れられて朱子学の重要な一部を構成した。そして朱子学の広範な伝播にともない、周惇頤の思想や生き方は中国をはじめ韓国、ベトナム、日本などのいわゆる儒教文化圏に大きな影響を与えるのであって、そのことは旧稿でも触れたとおりである[1)]。

筆者は二〇一一年十月十九日から二十日まで、中国江西省廬山山麓にある朱熹ゆかりの地、白鹿洞書院で開かれた国際朱子学会議に出席し、発表を行なった[2)]。そして会議終了後の十月二十一日、周惇頤の

1)「周惇頤について——人脈・政治・思想」（吾妻『宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察』所収、関西大学出版部、2009年）。

2) この国際会議のもようについては、井澤耕一「江右游記——「哲学与時代　朱子学国際学術研討会」に参加して」（『日本中国学会便り』2011年第２号、通巻第20号）に報告がある。

墓を訪れることができた[3]。

周惇頤の墓は廬山北方の九江市の南方郊外にある。現在その墓は立派に整備されているが、ここに至るまでにはさまざまな変遷をたどっている。本稿ではその歴史の紆余曲折をたどり、あわせて現況を報告したい。これはまた、現代中国における儒教のありようの一端についても示唆するところがあるであろう。

なお、本稿で使用する周惇頤の文集は南宋版を影印した『元公周先生濂溪集』十二巻（北京図書館古籍珍本叢刊八八、書目文献出版社）を用いることとし、ここでは南宋版『文集』と略称することにする。

一　周惇頤の墓

周惇頤、字は茂叔、号は濂溪。北宋の天禧元年（1017）、道州営道県（現在の湖南省）に生まれる。恩蔭によって仕官した彼は中央政府とはずっと無縁で、地方行政官として江西、湖南、四川、広東などに赴任し治績をあげた。この間、南安軍（現在の江西省南部）で少年時代の程顥・程頤を教え、彼らに大きな影響を与えたことは周知のとおりである。そして晩年の熙寧四年（1071）八月初め、五十五歳で廬山東方の南康軍知事となった。しかしほどなくして隠退し、廬山北の蓮華峰麓に立てた「濂溪書堂」に住んで晩年を過ごし、熙寧六年（1073）、五十七歳で死去した[4]。

周惇頤の墓は「江州徳化県徳化郷清泉社」の三起山に営まれた[5]。あとに述べるように、この墓域は清末の光緒年間に拡張整備され、清代の地名でいえば「九江郡徳化県徳化郷清泉社栗樹嶺」（栗樹嶺は三起山のこと）で、廬山蓮華峰から北二十里ほどのところにある。現在の地名では江西省九江市廬山区周家湾である。

興味深いことに、ここには周惇頤のほか、母の鄭氏、最初の妻の陸氏、二番目の妻の蒲氏が葬られている。四人の人物の合葬墓なのである。次に、彼らがここに埋葬されるに至った経緯について見てみよう。

一、母の鄭氏（仙居県太君）　周惇頤の母鄭氏は鄭燦のむすめで、鄭向の妹。周惇頤の父、周輔成に嫁いだ。周輔成は特奏名賜進士出身で、天聖九年（1031）、賀州桂嶺令（広東省北部）をもって卒し、故郷の道州営道県に葬られている。この時、周惇頤は十五歳。孤児となった周惇頤は母鄭氏とともに鄭向のもとに身を寄せる。鄭向は大中祥符年間の進士で、のち知制誥となり、さらに龍図閣直学士をもって知杭州となった高官であり、周惇頤の仕官もその恩蔭によっている。しかし、頼りの鄭向はその五年後の景祐三年（1036）、知杭州在任中に死去し、潤州丹徒県（現在の江蘇省鎮江市）に葬られた。続いて、翌年の景祐四年（1037）七月、鄭氏が五十五歳で死去し、鄭向の墓の傍らに葬られる。

3）同行したのは大阪大学の湯浅邦弘、島根大学の竹田健二、茨城大学の井澤耕一の三氏である。また、案内してくださったのは南昌大学の許家星氏である。感謝申し上げたい。

4）周惇頤の伝記については、特にことわらない限り許毓峯「周濂溪年譜」（『中国文化研究彙刊』三、金陵斉魯華西三大学、1943年）および注１所掲の拙稿による。

5）潘興嗣「先生墓誌銘」（南宋版『文集』巻八）、「仙居県太君墓誌銘」（同）、蒲宗孟「先生墓碣銘」（同）、度正「濂溪先生周元公年表」（同、巻首）。

ところがその後しばらくして、潤州の墓が水害によって毀損したため、熙寧四年（1071）十二月十六日、南康軍知事になったばかりの周惇頤はわざわざ鄭氏の遺骸を廬山の麓に移し、現在の墓地に改葬するのである。これらのことは潘興嗣「仙居県太君墓誌銘」（南宋版『文集』巻八）に詳しい事情が述べられている。

ところで、母鄭氏の改葬について度正の「濂渓先生周元公年表」（南宋版『文集』巻首、以下、「年表」と略称する）は熙寧四年の条に、

俄得疾、聞水齧僊居県太君墓、遂乞南康。八月朔、移知南康軍、十二月十六日改葬於江州徳化県清泉社三起山。葬畢曰、「強疾而来者、為葬耳。今猶欲以病汚麾紱耶。上南康印分司南京。

（俄かにして疾を得、水、僊居県太君の墓を齧むを聞き、遂に南康を乞う。八月朔、移して南康軍に知たり。十二月十六日、江州徳化県清泉社三起山に改葬す。葬畢りて曰く、「疾を強して来たるは、葬の為のみ。今猶お病を以て麾紱を汚さんと欲するか」と。南康の印を上りて南京に分司たり。）

と記している。また潘興嗣の「仙居県太君墓誌銘」は、鄭氏を潤州に葬ったことを記したあと、続いてこう伝えている。

後二十年、水壊墓道。惇頤以虞部郎中為広南東路提点刑獄、乞知南康軍、遂遷夫人之襯窆于江州徳化県廬阜清泉社三起山、熙寧四年十二月十六日也。

（後二十年、水、墓道を壊る。惇頤、虞部郎中を以て広南東路提点刑獄たるも、南康軍に知たるを乞い、遂に夫人の襯窆を江州徳化県廬阜清泉社三起山に遷す。熙寧四年十二月十六日なり。）

これらを読むと、周惇頤が知南康軍の職を乞うたのは、ほかならぬ母を改葬するためだったように見える。特に「年表」に「疾を強して来たるは、葬の為のみ」（病をおして南康にわざわざやって来たのは、母を埋葬するためなのだ）とあるのを見るとその感を強くする。これに対して「仙居県太君墓誌銘」の方は書き方がやや違うが、病を得たこと、南康軍知事就任の要望、母の改葬の三つが一連のこととして密接な関係にあったことは事実であろう。また、「年表」の最後に「南康の印を上りて南京に分司たり」というのは、南康軍知事を辞して南京応天府の分司官になったということである。分司官とは、実際の職務に就かなくても一定の俸禄が与えられる、引退直前の「閑職官」である[6]。ということは、周惇頤が南康軍知事の任にあったのはたった四か月あまりにすぎなかったことになる。

以上をふまえて考えれば、病を得た周惇頤は酷愛する廬山に隠棲して静かな余生を過ごそうと考え[7]、傍らに母の墓を置きたいと願ったのであろう。母の鄭氏が、父亡き後の周惇頤を苦労して育てあげたことは上述したとおりである。

なお、鄭氏は死後「仙居県太君」の称を贈られるが、これは北宋当時の文武群臣の母および妻に対する叙封の制による[8]。

6）龔延明『宋代官制辞典』（北京・中華書局、1997年）668頁の「分司官」条を参照のこと。

7）周惇頤は嘉祐六年（1061）四十五歳の時、虔州通判（江西省南部）となって虔州に向かう途中、廬山に遊び、その美しい景色に惹かれ、蓮華峰下を流れる小川に濂渓と名づけて「濂渓書堂」を建てた。そして、いつかここに隠棲したいと考えていた。度正「年表」参照。

8）『宋史』職官志十「叙封」に「庶子・少卿監・司業・郎中・京府少尹・赤県令・少詹事・諭徳・将軍・刺史・下都督・下都護・家令・率更令・僕、母封“県太君”、妻“県君”。其余升朝官已上遇恩、並母封“県太君”、妻“県君”」と

二、妻の陸氏（縉雲県君） 次に、周惇頤の二人の妻であるが、最初の妻（正室）の陸氏は職方郎中の陸参のむすめで、景祐三年（1036）、周惇頤二十歳の時に嫁いだ。陸参について詳しいことはわからないが、職方郎中というのは従六品相当の微官であり、他に伝記資料もないことから、さほど出世はしなかったらしい。陸氏は周惇頤の長子・寿の母であり、嘉祐三年（1058）、周惇頤四十二歳の時に卒した[9]。

三、妻の蒲氏（徳清県君） 二度目の妻（継室）の蒲氏は蒲宗孟の妹である。蒲宗孟は周惇頤より十歳ほど年少で、皇祐五年（1053）の進士。のち翰林学士を経て、元豊五年（1082）には副宰相たる尚書左丞にまで出世するが、わずか一年で知汝州に左遷される。その後、各地の知事を経て知大名府（河北省南部）で亡くなった。これに先立つ嘉祐四年（1059）、蒲宗孟は周惇頤の人柄に感銘を受け、妹を嫁がせた。この時周惇頤は四十三歳であった。蒲氏は周惇頤の次子・燾の母である。蒲氏がいつ死去したかは不明だが、蒲宗孟の「先生墓碣銘[10]」で「徳清県君」と称しているところから、周惇頤に先立って死去していたことがわかる。

この二人の妻がいつ合葬されたかのはよくわからない。ただ、陸氏についていえば、その死去は周惇頤が合州簽書判官庁公事として四川に赴任していた時であるから、いったんどこかに埋葬されたあと、熙寧四年以降ここに移葬されたのであろう。

四、周惇頤 上述したように、熙寧六年（1073）六月七日、周惇頤は五十七歳で死去する。まもなく同年十一月二一日、遺言により母鄭氏の墓の左側に埋葬された。そのことは潘興嗣の「先生墓誌銘」に「其年十二月二十一日、窆于徳化県徳化郷清泉社母大人之墓左、従遺命也」というとおりである。母の隣に埋葬してほしいという遺言はかなり特異なものと思われ、ここからも周惇頤が母に対して深い愛情をもっていたことがわかる。

二　周惇頤の顕彰と墓の修復

1　南宋

南宋に入ってしばらくすると、周惇頤は朱熹（1130-1200）や張栻（1133-1180）ら道学系の士人を中心に称賛され、一種の顕彰運動が始まる。とりわけ淳熙年間以降が顕著であり、彼らは周惇頤にゆかりの深い地区の州県学や書院に競って周惇頤を祀り、みずからの学問をオーソライズするようになる。そのことは南宋版『文集』や『濂渓志』などに載せる数多くの「祠記」「祠堂記」の類が示すとおりであ

あるのによるであろう。なお、この制度は北宋末の政和三年（1113）、蔡京によって改められ、蔡絛『鉄囲山叢談』巻一に「改郡県君号為七等。郡君者為淑人、碩人、令人、恭人。県君者室人、安人、孺人。俄又避太室人之目、因又改曰宜人」と見える。これ以後、「太県君」や「県君」の称は用いられず、代わりに孺人や宜人などが用いられることになったらしい。たとえば朱熹の場合、朱熹の高祖父・曾祖父・祖父はいずれも仕官しなかったが、父朱松の功績により夫婦に「承事郎」と「孺人」の号が贈られたといい（「皇考左承議郎守尚書吏部員外郎兼史館校勘朱府君遷墓記」、『朱文公文集』巻九十四）、母の祝氏を「先妣孺人」と呼んでいるのは（「尚書吏部員外郎朱君孺人祝氏壙誌」、同）、いずれもこの制によるものである。

9）『周子全書』巻二十所収の「進呈本年譜」（財団法人台北市広学社印書館、1975年）390頁、および陳克明点校『周惇頤集』（北京・中華書局、1990年）98頁。

10）蒲宗孟「先生墓碣銘」（南宋版『文集』巻八）。

る。いま、いくつか顕著な例を挙げてみよう。

たとえば、張栻は淳熙二年（1175）冬、広南東路提点刑獄公事の詹儀之が韶州曲江県（現在の広東省）に周惇頤の祠堂を作った際に祠堂記を寄せ[11]、同年、静江府知事の張某が府学の明倫堂の傍らに「三先生祠」を作ったのに対しても祠記を書いている[12]。三先生とは周惇頤と二程である。また、これらの祠堂にはいずれも「絵像」を描いて奉安した。さらに、淳熙五年（1178）、張栻は周惇頤の出身地である道州営道県（舂陵）に重建された祠堂にも祠堂記を寄せている。これは南宋初の紹興年間に建てられた祠堂を重建、拡張したもので、「堂四楹」という規模をもち、堂中に周惇頤および二程の像を置いたという[13]。

さて、江州（九江）の廬山山麓では淳熙三年（1175）、江州知事の潘慈明と通判呂勝己が濂渓書堂を再建した。濂渓書堂はかつて周惇頤の住まっていたところで、当時荒れ果てていたのを修復したのである。これを受けて、翌淳熙四年（1176）二月、朱熹は「江州重建濂渓先生書堂記」を寄せた。そこに次のようにいう。

> 先生姓周氏、諱惇頤、字茂叔、世家舂陵、而老於廬山之下、因取故里之號以名其川曰濂渓、而築書堂於其上。今其遺墟在九江郡治之南十里、而其荒茀不治則有年矣。淳熙丙申、今太守潘侯慈明与其通守呂侯勝已始復作堂其処、揭以旧名、以奉先生之祀。而呂侯又以書来、属熹記之[14]。
>
> （先生、姓は周氏、諱は惇頤、字は茂叔。世よ舂陵に家し、而して廬山の下に老う。因りて故里の号を取りて以て其の川に名づけて濂渓と曰い、書堂を其の上に築く。今、其の遺墟、九江郡治の南十里に在るも、其れ荒茀治めずして則ち年有り。淳熙丙申、今の太守潘侯慈明、其の通守呂侯勝己と始めて復（ま）た堂を其の処に作り、揭（かか）ぐるに旧名を以てし、以て先生の祀を奉ず。而して呂侯も又た書を以て来たり、熹に之を記さんことを属す。）

このあと朱熹は、周惇頤の書を読むにつけ江州と廬山を訪ねてみたくなると、その人となりを慕っている。

この三年後の淳熙六年（1179）三月、朱熹はかつての周惇頤と同じ南康軍知事となって江西に赴いた。いわば念願がかなったことになる。そして四月、周濂渓祠を南康軍学に立てて周濂渓の像を奉安し、これに二程を配した。文集に載せる「奉安濂渓先生祠文」はその時に読み上げられた祭文である[15]。この時には張栻も祠記を寄せている[16]。また、この前後、朱熹は周惇頤の遺跡を訪ね歩いたというから、墓にもやって来たに違いない[17]。このほか、同年の五月、朱熹は周惇頤の著作『太極通書』を南康軍学から刊行しており[18]、さらに十月には白鹿洞書院を復興している[19]。

11）張栻「濂渓周先生祠堂記」（『南軒集』巻十、楊世文・王蓉貴校点『張栻全集』中冊、長春出版社、1999年、794頁）。
12）張栻「三先生祠記」（『南軒集』巻十、楊世文・王蓉貴校点『張栻全集』中冊、707頁）。
13）張栻「道州重建濂渓周先生祠堂記」（『南軒集』巻十、楊世文・王蓉貴校点『張栻全集』中冊、698頁）。
14）朱熹「江州重建濂渓先生書堂記」（『朱文公文集』巻七十八）。
15）朱熹「奉安濂渓先生祠文」（『朱文公文集』巻八十六）。
16）張栻「南康軍新立濂渓祠記」（『南軒集』巻十、『張栻全集』中冊、706頁）。
17）王懋竑『朱子年譜』淳熙六年三月の条、束景南『朱熹年譜長編』（華東師範大学出版社、2001年）巻上、621頁。
18）朱熹「再定太極通書後序」（『朱文公文集』巻七十六）。
19）王懋竑『朱子年譜』淳熙六年十月の条。

こうして南宋中期、周惇頤の存在が道学者たちの運動により、はっきりとクローズアップされるようになったのである。その後、注目すべきことは嘉定十三年（1220）、魏了翁らの要請により周惇頤に「元」という諡が与えられたこと[20]、淳祐元年（1241）、南宋王朝が周惇頤、張載、程顥、程頤、朱熹を孔子廟に従祀するとともに、周惇頤を汝南伯に追封したことであろう[21]。これらのことが、周惇頤に始まる朱子学（道学）の系譜、すなわち「道統」の確立を意味することはいうまでもないであろう。伝統中国における周惇頤の位置づけが決定されたのである。

この前後には、嘉定十四年（1221）、朱熹門人の度正が周惇頤の遺文を集め、文集を編纂している[22]。墓についていえば、端平元年（1234）に修復がなされるとともに祭田が置かれ[23]、宝祐元年（1253）には墓の右側に室が築かれて周惇頤の像が置かれた[24]。

2　元から清へ

このように、南宋中期に始まる周惇頤顕彰の勢いは、元代以降も基本的に変化せずに続いた。元の延佑六年（1319）には周惇頤に道国公が加封され、明の正統元年（1436）には祠墓が修復されるとともに、子孫に恩恵が与えられた[25]。

弘治三年（1490）には九江府知事の童潮が雑草に覆われていた墓を修復し、墓前に三間の祠堂を建てて周惇頤像を安置して「宋元公濂渓先生祠」の扁額を掲げた。これとは別に三間の愛蓮室を設けるとともに、前に池を穿って蓮を植え、さらに祭田を置いた[26]。同十六年（1503）には江西督学副使の邵寶が祭田を拡張し、周惇頤の子孫周綸を道州から呼び寄せて祭祀を管理させることにしたという[27]。さらに、正徳六年（1511）には傅楫によって墓祠が修復され、祭田も増置された[28]。ついで翌正徳七年（1512）には廖紀が「公廩陶甓数万」を拠出し、二ヶ月間ほどかけて墓域を修理している[29]。そして、嘉靖三十八年（1559）には墓域修理の際に「宋知南康軍濂渓周先生」の文字を刻む、といったぐあいである[30]。

清の咸豊五年（1855）二月には羅沢南が李続賓とともに墓を整備している[31]。羅沢南（1807-1856）は湖南湘郷県の人で、太平天国の乱にあたって郷勇を編成し曾国藩の湘軍の中心部隊となったことで知られ、当時、九江付近における攻戦中の閑暇に墓を訪ね、その修復を命じたのであった。武将だが朱子学

20）度正「年表」参照。

21）『宋史』理宗本紀、「進呈本年譜」（『周子全書』巻二十所収）。

22）度正「書文集目録後」（南宋版『文集』巻八）。

23）趙善璙「濂渓書堂諡告石文」（『希賢録』巻上）。『希賢録』については後述参照。

24）何子挙「先生墓室記」（南宋版『文集』巻八）。

25）『希賢録』巻上「歴代尊崇典礼」、『周子全書』巻二十一「列代褒崇」。

26）「童潮濂渓祠墓記」（『希賢録』巻下）。

27）「廬山氏志了髻山東北為鳳凰山天花井山西北為栗樹嶺、其下有濂渓先生墓」（『希賢録』巻下）、「査取後裔赴九江守墓公檄」（同）。

28）「傅楫重修墓祠増置祭田記録」（『希賢録』巻下）。

29）「廖紀重修濂渓先生墓記」（『希賢録』巻下）。

30）彭玉麟「重修周子墓碑記」（『希賢録』巻下）。

31）「羅沢南修濂渓先生墓記」（『希賢録』巻下）。

に造詣が深く、著述も多い。李続賓はその部下で、同郷である[32]。彼らはともに湖南の出身者として郷土の名賢周惇頤を顕彰する意図があったに違いない。

総じて、南宋以後清代まで、歴代王朝や郷紳、士人により周惇頤の墓の維持と修復が連綿と続けられてきたことがわかる。

三　清末光緒年間における整備

周惇頤の墓の整備がピークに達したのが光緒九年（1883）六月、彭玉麟とその配下によってなされた大規模な拡張である。その記録が彭玉麟輯『希賢録』としてまとめられているので、以下、主にこれによって述べたい。

『希賢録』は上下二巻の刊本で、上巻二十二葉、下巻十四葉。内題の下に「衡陽後学彭玉麟謹輯」とある。光緒九年（1883）春三月の彭玉麟序があるが、巻頭の「濂渓墓図」に続いて載せる「説」の文末には「光緒癸未秋八月益陽丁義方謹撰」とあるので、同書は光緒癸未すなわち同九年の秋から冬にかけて刊行されたものと思われる。各巻末には「桐城存之方宗誠／善化麓樵胡伝釗　分校」「芷江与吾李成謀／益陽燕山丁義方　合刊」とある[33]。『希賢録』の名は、いうまでもなく周惇頤『通書』の句「士希賢」（士は賢を希（こいねが）う）による。

編輯者の彭玉麟（1816-1890）は湖南衡陽県の人。名は玉麟と表記されることもある。前述の羅沢南と同じ湘軍の武将で、曾国藩のもとで湘軍水師を創設し、太平天国の乱鎮圧などに数々の軍功を挙げ、太子少保、一等軽車都尉となり、長江水師の制を定めた。光緒九年当時は軍部大臣に相当する兵部尚書の任にあった大官である。

丁義方は湖南益陽の人、李成謀は湖南芷江の人でともに彭玉麟配下の武将。光緒九年当時、丁義方は湖口鎮総兵であり、李成謀は長江水師提督であった[34]。胡伝釗は江西新昌県の知県である[35]。方宗誠は安徽桐城の人で、『漢学商兌』の著者方東樹の族弟。後期桐城派を代表する学者で、朱子学の共鳴者でもあった[36]。

さて、巻頭の「濂渓墓図」は〈図１〉のとおりである。これに附される丁義方の「説」（図の解説）にこの時の修復のいきさつが述べられているので、全文を引用する。

> 濂渓周元公墓在九江郡南十里許、係隷徳化県属之徳化郷清泉山、地名栗樹嶺、亦名三起山、即廬阜了髻山西方之分支也。墓雖面蓮花峯、而相去二十余里、廖記所称窆於清泉社蓮花之岑、羅記所称墓在潯城東南蓮花峯下、皆悞。義方始聞徳化知県劉君長景之言、得確知元公墓所。暨於光緒辛巳、随

32）『清史稿』巻四百七・羅沢南伝、同書巻四百八・李続賓伝。

33）『希賢録』は近年、兪冰・馬春梅編『周濂渓先生実録』第四冊（中国歴史名人別伝録２、学苑出版社、2007年）に影印されており、本稿でもこれを用いた。

34）丁義方と李成謀の伝記はともに『清史稿』巻四百十五に見える。また彭玉麟「重修周子墓碑記」（『希賢録』巻下）参照。

35）後述の「濂渓墓図」の「説」による。

36）『清史稿』巻四八六・方宗誠伝。

侍彭大司馬率同正任新昌知県胡君伝釗、往謁之、乃定集貲修墓之挙、自壬午夏経始、洎癸未春蔵事。計拓垣囲長八十余丈、高視旧加倍、深其址、而石塁以甓而増厚焉。宰木数十株、周環於内、墓之礪磈原罅也、則規石而封之。前有祠、明季已燬於兵。今且濂渓祠与書院遍天下、復可不亟。遂度祠基、建舎於左右、俾奉守者有棲息、展礼者有斎沐之処。崇高其門、而坊表之、自門至墓、級石為道。旧有碑仍之、新立碑四、中為元公母仙居県鄭太君墓、左為元公墓、右為元公配縉雲陸県君、継配徳清蒲県君、皆彭公所敬題。義方則謹摹元公遺像、兼図所愛蓮花於石、以表潔而遺芳、庶俾過墓則式者有所宗仰乎。公竣以告彭公、為之記。彭公復以徴考文献有繫於元公最要者、輯為希賢録、命胡君伝釗継方存之先生分校督刊。義方亦遵命絵鍥墓図、且為説以附於後。抑更有説者、聖賢大原無不包、以墓為元公体魄所蔵、則任修毋嫌越俎。況有京兆趙将軍重修濂渓祠宇之例、在責何敢辞。但不為希賢君子所譏、斯為幸耳。時光緒癸未秋八月、益陽丁義方謹譔。

ここにはおおむね次のことが述べられている。

一、周惇頤の墓の正確な位置を確認した。これにともない、廖紀の「廖紀重修濂渓先生墓記」と羅沢南の「羅沢南修濂渓先生墓記」の記述の誤りを指摘している。

二、「光緒辛巳」すなわち光緒七年（1881）、彭玉麟が江西新昌県知県の胡伝釗を連れて墓に赴き、修復を計画した。

三、「壬午夏」すなわち光緒八年（1882）夏に修復工事を始め、「癸未春」すなわち翌年の光緒九年（1883）春に竣工した。

四、周囲を取り囲む塀の長さは八十丈あまり、高さはそれまでの倍とし、基礎も深く掘り下げたうえ、上に瓦を載せ、塀を厚くした。

五、樹木を数十株植えて周囲にめぐらせた。

六、墳墓の盛り土（「礪磈」）にはひびが入っていたので、切りそろえた石で上を覆った。

七、墓前には祠堂があったが、明末の戦乱で焼失していたため、左右に建物を造り、墓守の休息と祭礼者の斎戒沐浴の場とした。

八、門を高くし、さらに牌坊を作った。

九、門から墳墓まで石段の道を作った。

十、旧碑はそのままとし、新たに碑を四つ立てた。すなわち、中央が周惇頤の母鄭氏の墓碑、左が周惇頤の墓碑、右が周惇頤の妻の陸氏と蒲氏の墓碑であり、いずれも彭玉麟が表面に題字した。

十一、丁義方が模写した周惇頤の遺像、および蓮の花を石に刻んだ。

十二、彭玉麟が周惇頤に関する主要文献を『希賢録』としてまとめ、胡伝釗と方宗誠に校勘、出版するよう命じた。

十三、『希賢録』には丁義方が墓図を描くとともに、その解説を附した。

十四、なお、ここには述べられていないが、彭玉麟「重修周子墓碑記」によれば、それまで墓碑表面の題辞に「宋知南康軍濂渓周先生墓」とあったのに「元公」の二字を加えたという。

これらを見ると、きわめて大規模な修復だったことがよくわかる。そして竣工なった光緒九年六月四

日、彭玉麟は文武の賓僚数十人とともにこれを祝い、墓祭を行なった[37]。

四　常盤大定の調査

この彭玉麟による整備により、周惇頤の墓はその後長い間維持された。大正十一年（1922）、彭玉麟による整備の三十九年後、日本の常盤大定はここを実地調査し写真入りの『支那文化史蹟』を刊行しており、当時の様子をよく伝えてくれる。

常盤の記録は次のとおりである[38]。

周濂渓墓

江西省九江市の南方十里舖に、周濂渓の墓があり、十里舖より左折する五支里に位置する。元公周夫子墓と榜する石門を入れば総門がある。堂々たるもので恐らくは儒家墓で、斯る体裁を有するもの、他に多くの比を見まいと思ふ。こゝに周子の後裔があるのに縁由するであろう。総門内の磴道を登れば、周濂渓の墓である。周囲を繞らすに石塀を以てし、墓前に三碑あり、左右に両碑がある。周子の墓に左の如くに刻して居る。

濂渓先生像賛

道脈
- 先賢宋元公濂渓周子墓　光緒癸未
- 宋贈仙居県太君周子母鄭太君墓
- 宋贈縉雲県周子元配陸夫人
- 徳清県周子継配蒲夫人

墓

この墓を囲む石塀の中央に左の三碑がある。

宋知南康軍濂渓周先生墓　嘉靖甲寅

重修濂渓周子墓碑　咸豊甲寅

太極図

筆者がこゝを訪へるは、大正十一年十一月廿八日であつた。

この時に撮られた写真を〈図２〉～〈図４〉に掲げておく。これらを〈図１〉の「濂渓墓図」およびその解説と比較すると、常盤訪問時にも光緒時代のかつての面貌がよく保存されていたことがわかる。門が高大で高い石塀がとり囲んでいること、墳墓を石で覆っていること、周惇頤の画像が石に刻まれていることなどからそれがわかる。また「墓前に三碑あり」として、中央に母の鄭向の墓碑、左に周惇頤の墓碑、右に二人の妻の墓碑が立ち並んでいること、周惇頤の墓碑に「元公」とあることも彭玉麟の整備時と共通している。丁義方が模写したという周惇頤の遺像も周惇頤墓碑左側（向かって右端）の碑に

37）方宗誠「謁周濂渓先生墓記」（『希賢録』巻下）。

38）常盤大定・関野貞『中国文化史蹟』解説下（法蔵館、1976年）による。同書はもと『支那文化史蹟』の名で法蔵館から1940年に刊行された。

刻されている。遺像の横には、解説にもあるように「濂渓先生像賛」の文字が刻まれているが、これも光緒時代のままであったろう。

このほか、常盤は、墓を囲む石塀の中央にある三つの碑に「宋知南康軍濂渓周先生墓 嘉靖甲寅」、「重修濂渓周子墓碑 咸豊甲寅」とあると記しているが、これらはそれぞれ、上述した明の嘉靖年間および清の咸豊年間に立てられたものにほかならない。〈図２〉の左後方に見える、塀にはめ込まれた碑がそれである。常盤は周惇頤の墓を「堂々たるもの」で「斯る体裁を有するもの、他に多くの比を見まいと思ふ」というが、それは常盤のいうように周惇頤の後裔がここに住むからではなく、清末の名声赫赫たる彭玉麟が大々的に拡張したからこそ、このような規模になったのである。

おわりに——文革以後、現在まで

本稿では周惇頤の墓をめぐって、その長い歴史をたどってきた。最後に文化大革命以後、現在までの状況について報告したい。

墓は文化大革命の時に徹底的に破壊された。筆者は北京留学中の一九八三年五月十四日、ここを訪れたことがある。北京—南京—鎮江—揚州—鎮江—無錫—蘇州—上海—九江—廬山—九江（周惇頤の墓）—漢口—北京という長い一人旅であった。当時の筆者の日記によれば、九江市内からバスで行く途中で乗客に尋ねると、彼らは「いま行っても何もないからわかりゃしない」などと、盛んに議論していた。バスを降りて農路を歩き、墓域らしきところにたどりついてみると、窪地の中心に人工的な盛り土があり、それが周惇頤の墓であった。周囲は雑木の茂る畑になっていて、建築物もなく、ただ塀の残骸と瓦の破片が散らばっている。教えてもらわなければ、ここが墓だとはわからない。携えてきた常盤大定の著書のコピーとはまったく違う風景が広がっていたのである。地元の人に聞くと、文革中に破壊されてしまったと口をそろえていい、はなはだ落胆した。ただ、そこから南方に見える廬山の眺めはやはり美しく、地元の人も口々にそういっていた。

さて、冒頭に述べたように、その後、墓は立派に修復された。その経緯を現在、墓域内に立てられている碑文「盛世修文頌濂渓——濂渓墓重修記」（資料１）によって整理してみよう。

墓は一九五九年に省級の文物保護単位に指定された。しかし文革中に破壊され、わずかに墓穴を残すだけとなってしまった。しかし文革が終わると子孫は修復に奔走し、一九九八年には香港の周氏宗親会（宗親会は子孫で作る団体）が政府と民間から募金二十万元を集め、まず墓冢、囲墻（周囲の塀）などを復元した。さらに二〇〇四年、子孫の出資により「周氏后裔祭祀先祖暨濂渓墓修復規画研討会」が開かれ、会上で「修墓委員会」が設立された。委員会は国内・海外の子孫たちにも呼びかけて二百万元を募り、九江市政府との協力を得て全面的に修復を加え、かくしてかつての姿をとり戻したという。

ここに、昨年十月、筆者が二十八年ぶりに再訪した際に撮った写真を掲げておこう。これらを見てもわかるように、現在、墓は立派に修復され、堂々たる規模を誇っている。まず南側手前に牌坊があり、後ろに墓道が続く（図５）。ついで墓域の門があり、左右に伸びる高い石塀が墓域をぐるりと取り囲んでいる（図６）。門内に入ると、中央に愛蓮池が、左右に展示館がある。正面の石段を三十メートルほど登ると（図７）、上に平坦な広がりがある。その中央に石板によって覆われた墳墓があり、前に三つの石碑

が立ち並んでいる（図８～図10）。中央が母の鄭向、左が周惇頤、右が二人の妻のものである。さらに左右の端には絵を刻んだ小さい碑がある。墓域の面積は全体で四千平方メートルあまりあるという。

このように、宗親会によって彭玉麟当時の姿ができるだけ復元されたことがわかる。しかし、違いもある。たとえば、周惇頤の母の墓碑および二人の妻の墓碑にはいずれも「公元一九九九年九月　日　重立」の文字があり、母の墓碑の左側の碑には周惇頤の像が刻まれているものの、常盤大定の写真に見える「濂渓先生像賛」の文字はない。周惇頤の墓碑だけは表面に「後学衡陽彭玉麟敬題」の文字が見えるので光緒時代のものらしい。このほか、背後の石塀には確かに三つの石碑がはめ込まれているが（図９）、それは「太極図・図説」、『通書』および「愛連説」であった。本来はここに嘉靖年間「宋知南康軍濂渓周先生墓」の碑や咸豊年間「重修濂渓周子墓碑」がはめ込まれていたはずなのだが、それはすでにない。要するに、文革時期に墓穴を残して破壊されてしまったというのは事実であり、墓および墓域は、ほとんどすべて新しく造営されたものなのである。

ただし、もっと驚いたのは、本稿でもしばしばとりあげた潘興嗣「仙居県太君墓誌銘」が墓域内の展示館に置かれていたことである（図11）。石板に刻まれた現物である。案内してくださった許家星氏によると、近年、畑の中から発見されたものという。墓誌銘はそもそも墓前に埋められるから、これは北宋時代、周惇頤が母を潤州から改葬した時、墓誌銘もこちらに移して埋めたものということになる。この墓誌銘は周惇頤当時の遺物としてはほとんど唯一のものであり、きわめて貴重である。かりに文革による破壊がなかったら、この墓誌銘は地中に埋まったまま、その存在すら知られなかったことであろう。不幸中の幸いというべきであろうか。

もう一つ、展示館を参観して初めて知ったことであるが、かの周樹人（魯迅）、周作人、周建人兄弟、および周恩来が周惇頤の子孫だということである。「周氏家譜展」の額がかかる展示館には、周惇頤の新しい坐像（図12）とともに「周氏後裔名人介紹」として、彼らの紹介パネルが展示されていた。いくつかの『周氏宗譜』の展示もあり、もう一つの展示館には周恩来手筆の「愛蓮堂」の扁額が掛かっていた（図13）。彼らの家系についていま確認する暇はないが、周惇頤の子孫であることは事実と見て間違いないのであろう。このことは従来、ほとんど知られていないので、ここで注意を喚起しておきたい。

さて、ここで改めて気づくのは、文革による伝統文化の破壊がいかにすさまじいものだったかということである。方宗誠は光緒年間の修復にあたって、咸豊以後兵乱が続き、廬山の名勝や仏寺の多くは損害を被ったが、周惇頤の墓は樹木や石碑、墳土などを毀損する者はなく、盗賊であってもこれを「泯滅」することはできなかったといっている[39]。清末の大混乱期にも破壊されなかった墓は、しかし、文革期において文字どおり「泯滅」してしまったのである。長い中国の歴史においても文革ほど深刻な文化破壊を行なったケースはやはり稀だったといわなければなるまい。

もっとも、近年は伝統文化や儒教の再評価が著しく進んでいることも事実であり、周惇頤の墓の修復は海外の華人の支持も得ている。また、墓のすぐ南側を走る真新しい道路は、その名も「濂渓大道」という。付近には「九江濂渓賓館」や「濂渓農貿市場」もある。墓の西方すぐ近くには二〇〇〇年に開設された大学、九江学院があるが、その広大なキャンパス内には大きな愛蓮池が作られ、周惇頤の像が立

39）方宗誠「謁周濂渓先生墓記」（『希賢録』巻下）。

っていた。九江学院のホームページを見ると、その歴史は実に一〇七一年、周惇頤の「濂溪書院」（正しくは濂溪書堂）の創建に始まると明記されている。濂溪書院は清末の一九〇二年に九江中学と改称され、現在の九江学院の母体となったというのである。これらのことは「盛世修文」を再び目指そうとする現代中国の趨勢を物語っているというべきである。

（本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)(一般)「東アジアにおける伝統教養の形式と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」〔平成21～24年度、研究代表者：吾妻重二〕による成果の一部である）

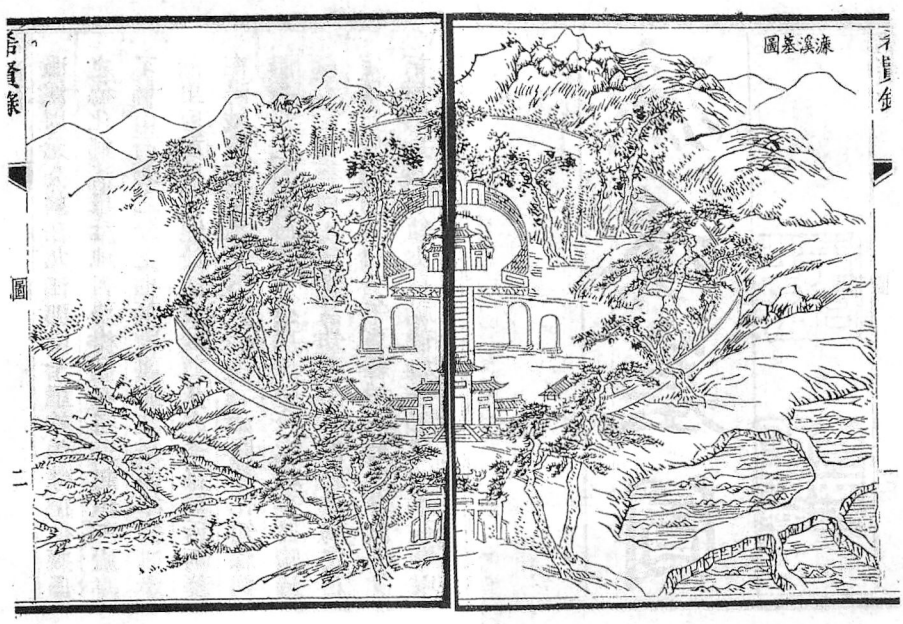

図1　濂溪墓図
（『希賢録』巻首）

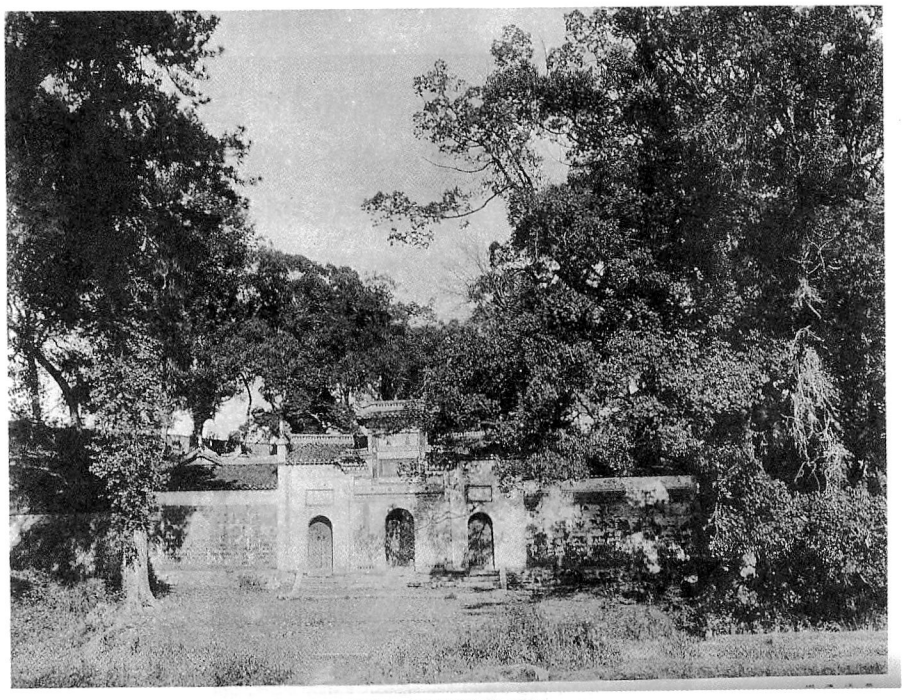

図2　周惇頤墓の門
（常盤大定・関野貞『支那文化史蹟』）

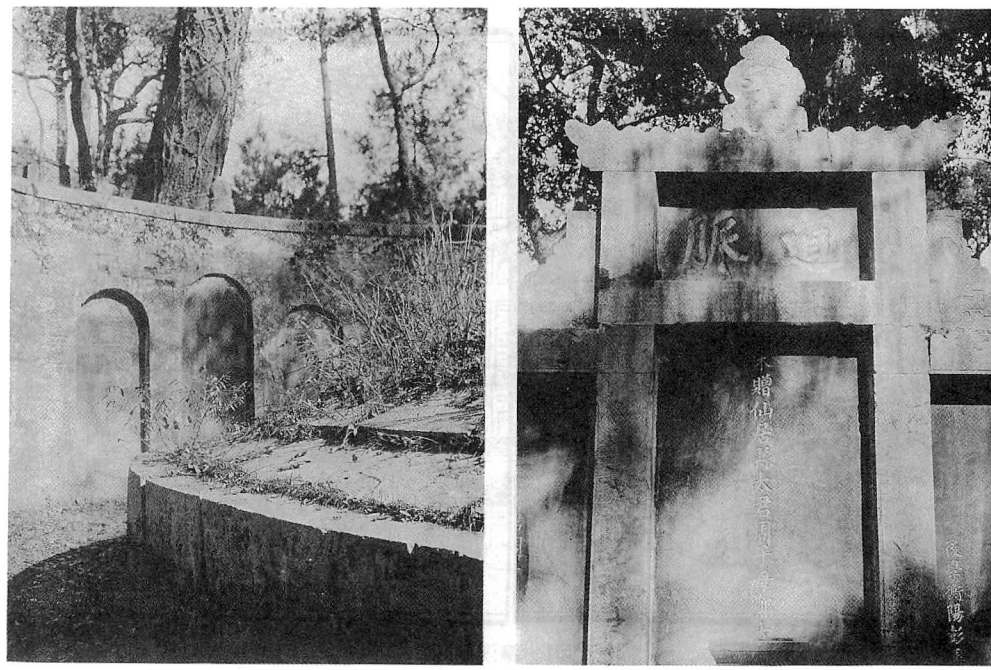

図3　周惇頤の墓
（常盤大定・関野貞『支那文化史蹟』）

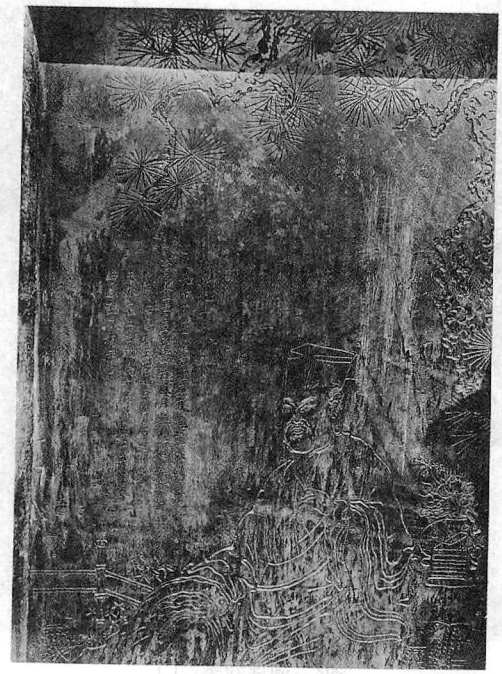

図4　周惇頤遺像
（常盤大定・関野貞『支那文化史蹟』）

図5　牌坊、墓道、墓域

図6　墓域の門

図7　墓域内部の石段

図8　周惇頤、母、妻の墳墓（1）

図9　周惇頤、母、妻の墳墓（2）

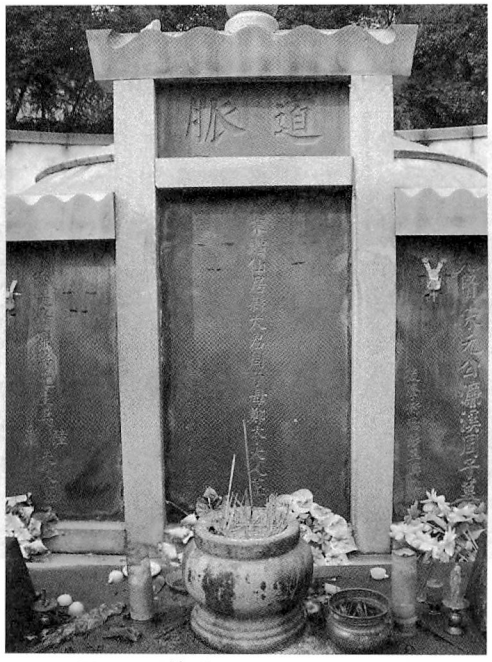

図10　周惇頤、母、妻の墳墓（3）

図11　潘興嗣「仙居県太君墓誌銘」

図12　周惇頤坐像

図13　周恩来「愛蓮堂」扁額

盛世修文頌濂溪

── 濂溪墓重修記

盛世修文，古今皆然。今重修濂溪墓，以承先人之遺風，夙后世子孫之願，供仰慕者以瞻。

濂溪墓歷千年滄桑，1959年被列爲省級文物保護單位。毀于文革、僅存墓穴。文革后，族裔周觀源奔走四方，呼吁修復。1998年香港周氏宗親總會周國枚、 國材、楚階、漢明等來潯謁祖，九江市文物名勝管理處與之聯手，以政府撥款和民間募捐計20萬元， 完成了一期墓冢、 圍墻、 照壁的復原。2004年蘇州鴻利機電設備公司董事長周斌炎出資召開 “周氏后裔祭祀先祖暨濂溪墓修復規劃研討會”，會上成立修墓委員會，由香港周氏宗親總會理事長周楚階擔任委員會主任。他廣結善緣于海内外，聯同美國僑領周謙益、蘇州周斌炎、重慶周厚勇等，共筹款200萬元左右，九江市文物名勝管理處主任吳宜先積極支持，組織全面修復，終使墓園煥然于世。

濂溪先生，理學鼻祖，圖説太極，詮釋周易；胸中灑落，光風霽月；道德文章，千古流芳。后世憑吊者絡繹不絶。今景觀已復，而道脈重傳，告慰先生于九泉之下。特爲之記以志其盛。

周氏宗親重修濂溪祖墓委員會

顾　　问：吳錦萍　郭建林　周　儀　周謙益　周炎沐
　　周漢彬　周國枚　周國材　周漢明　周振基
　　周炳樹　周國屏　周朝宜　葉偉平

主任委员：周楚階

常务副主任委员：周斌炎　吳宜先　周厚勇

副 主 任 委 员：周黄麗英　周厚立　周開泉　周志峰
　　葉筱慧　周桂洪　周日新　周鎮隆
　　周锡强

九江市文物名勝管理處　立

資料1「盛世修文頌濂溪――濂溪墓重修記」
（漢字の字体はもとのままとした）